**シルクの使い道**

江戸時代（１６０３～１８６７年）には、織物は、標準的な小袖（「小さい袖」を意味する）着物を作るのに要する生地の量を基準に測られた。１枚の小袖を作るために要する量が１反（幅３６センチ、長さ１１．４ｍの一巻きの生地）とされていた。

 １反の絹を作るには、精製された絹が６５０グラム必要であり、生糸は９００グラム生産する必要がある。この量の生糸を作るには、４，９００グラムの繭、すなわちおよそ２，６００個の繭を必要とするのだ。１個の繭は、実のところ、長さ１，３００～１，５００ｍの一続きの絹を固く巻いて作られている。３～５本がまとめて糸巻きに巻かれ、一本の生糸が作られる。

 今日では、絹はもちろん衣類を作るためにも使われるが、化粧品や三味線の弦の製造や、日本画（日本の絵画）の制作にも使用される。また、医学の分野（縫合や人工静脈などに使われる）においても重要な役割を果たしている。